

金山寺本堂の火災について

Report on the Fire of Main Hall of the Kanayamaji Temple in Okayama

金玟淑¹・谷口仁士²

Minsuk Kim and Hitoshi Taniguchi

¹立命館大学専門研究員 歴史都市防災研究所 (〒602-8341 京都市北区小松原北町58)

Senior Researcher, Ritsumeikan University, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage

²立命館大学教授 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Professor, Ritsumeikan University, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage

The main hall of Kanayamaji temple is located in Okayama prefecture and is built in the Momoyama period of Japan. And this building is designated as a National Treasure in 1923, became an Important Cultural Property under the Cultural Properties Protection Act (enacted in 1950). But the terrible fire occurred in this building on December 24, 2012. Therefore we carried out the field work investigation and the hearing investigation to the owner on February 6, 2013. This article reports the result based on two above investigations.

Keywords : Fire, Cultural Property, Disaster, Fire-prevention facilities

1. はじめに

2012年12月24日の19時35分頃に金山寺本堂にて火災が発生した^{1) 2)}。金山寺は岡山市街地から北へ約10kmの金山中腹にある天台宗の寺院で、正式な名称は銘金山観音寺遍照院という³⁾。

金山寺(図1)は国指定の重要文化財2件(本堂、金山寺文書 附金山観音寺縁起)、県指定の重要文化財4件(護摩堂、三重塔、木造阿弥陀如来坐像、五鈷杵・五鈷杵)、市指定の重要文化財1件(仁王門(山門))を所有する。本堂は大正12(1923)年3月28日に国宝に指定され、文化財保護法により重要文化財となった(官報書換は、昭和45年6月17日である)もので、昭和34年に屋根葺き替えの工事が行われた建物である⁴⁾。

今回の火災は金山寺の敷地内で一人暮らしをしている住職の留守中に発生したもので、近所の住民による119番通報を受けた岡山市消防局による消火活動が行われたが、木造瓦葺き平屋の本堂約165平方メートルと、木造平屋の倉庫約13平方メートルが全焼し、午後10時すぎに鎮火した²⁾。マスコミの報道では、出火原因として本堂で常に使用していた蠟燭が挙げられた。

金山寺本堂の火災は、国宝・重要文化財(建造物)において新たに指定されたものを除いては自動火災報知器の設置が普及している中での火災であり、その他にも平成20(2008)年の重要文化財吉志部神社本殿(大阪府)の焼失、同21年の重要文化財旧住友家侯野別邸(神奈川県)の焼失、国宝石上神宮撰社出雲建雄

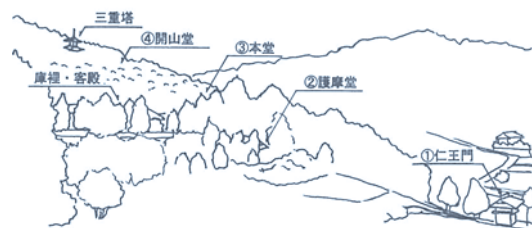


図1 金山寺境内全景³⁾

神社拝殿（奈良県）の放火による一部焼損などからわかるように、日本の文化財防火対策が十分とは言えない現状を示す一事例でもある。

そこで、筆者らは金山寺本堂の被害程度から文化財の指定解除の可否や被災建物の復旧などについて調査を行うことで、日本の文化財防災の課題を知ることができると判断したため、火災から約1ヶ月が過ぎた2013年2月6日に現地調査を実施するとともに、金山寺の住職である松原宏澄氏にヒアリング調査を行った。本稿はその調査成果をまとめたものである。

2. 被災した文化財の概要

(1) 焼失前の金山寺本堂

金山寺本堂（図2、図4）は、天正3（1575）年に岡山城主宇喜多直家の助力を得て、金山寺中興の祖と仰がれる圓智によって再建されたと伝えられる桃山時代の建物である。この建物は、桁行5間、梁間6間、一重入母屋造、正面1間向拝付き、本瓦葺きの南面する建物で、四周には濡縁を回している。内部（図3、図4）は、前面2間通と両側1間通が外陣、中央奥の3間4面が内陣、前面2間通の外陣部は吹放しの時期があり、海老虹梁、長押等の彩色に風蝕がみられる。間仕切りの欄間や大虹梁等に施された彫刻、彩色は絢爛たる桃山様式の特徴が発揮されている。また、内陣の奥正面に仏壇を設け、大型の厨子を置いて本尊千手観音を安置している⁶⁾。



図2 金山寺本堂の古写真⁵⁾

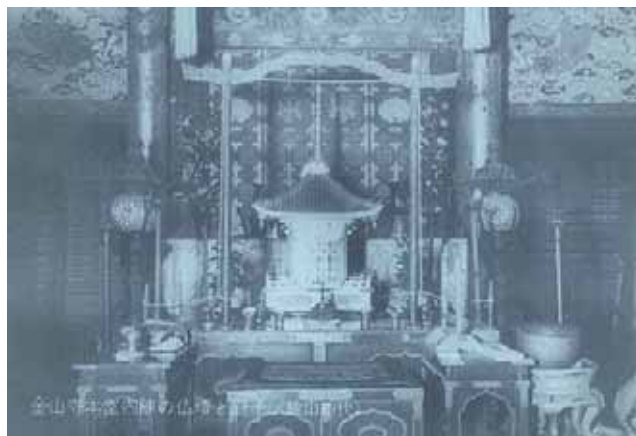


図3 金山寺本堂内陣の仏壇と厨子⁶⁾

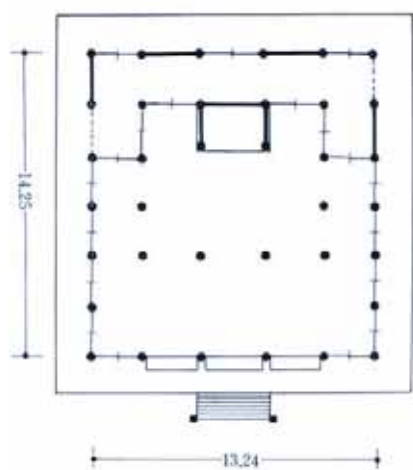


図4 本堂平面図⁵⁾



図5 焼失前の木造阿弥陀如来坐像⁷⁾

(2) 木造阿弥陀如来坐像

木造阿弥陀如来坐像（図5）は、昭和36（1961）年7月25日に岡山県重要文化財（彫刻）に指定された。こ

の仏像は、桧材の寄木造で、総高85cmである。本像には銘文が見られず、製作年代や作者は不明であるが、面相や衣の文様などから平安時代末期の作と推定されている⁷⁾。

3. ヒアリング調査

ヒアリング調査の概要は下記の通りである。

- 調査日：2013年2月6日（水） 13時～15時
- 場所：金山寺
- 話し手：松原宏澄（76才、金山寺住職）
- 聞き手：谷口仁士（立命館大学）、金玖淑（立命館大学）、東久保政勝（住友電気工業株式会社）、飯村治子（竹中工務店）（計4名）

(1) 火災の原因及び火災覚知と被災履歴

ヒアリング調査は火災発生から約1ヶ月が経った時点で行われたが、出火原因は火災直後のマスコミによる報道（蠟燭による火災として推定）とは少し異なり、不明と結論づけられたようである。しかし、ヒアリング調査から次のような5つの原因を抽出することができた。

- ① 蠟燭の転倒：まず、蠟燭の燃え尽きによる火災を考えられるが、松原氏が当寺の住職を務めて50年も経っているが、蠟燭の燃え尽きは今まで全くなかったし、蠟燭の炎は自然消滅するのが一般的であるため、蠟燭の転倒が妥当だと考えるようである。金山寺では、本堂入口は近所の人がいつでもお参りできるように常時開放しており、灯明（蠟燭）は常に絶やさないが、燭台は大きく、机の上に置いてあるため、自然に倒れたとは考えにくく、風による転倒と可燃物質が近くにあった可能性が挙げられる。
- ② 電気の漏電：電気設備の老朽化に伴う漏電があり得る。
- ③ 動物による火災：猿などが出没しているため、動物が蠟燭を蹴り①の蠟燭の転倒に繋がった可能性がある。
- ④ 放火：金山寺では約10年前に龔唾者による放火で小さい堂が焼失したことがあるため、一つの可能性として取り上げられた。
- ⑤ その他：寒い時期には檀家たちのために石油ストーブを出しており、ストーブが原因となった可能性も僅かながらあるようである。

火災発生時に住職は不在で、近所の人が瓦の割れる音を聞いて気づいたというのは、かつての報道で知られている通りで、火災発生に気づいた時にはかなり火の手があがっていたものと松原住職は推測していた。また、住職は比叡山延暦寺の大講堂の焼失（昭和31年）を体験しており、その体験から次のように述べた。「火災の際の火消しに熊手ぐらいではどうにもならないことは僕もよく知ってる。近隣の住民も交えた消防訓練が必要。護摩焚きが年3回（1月28日、5月28日、7月28日）はあるため、その機会を利用したらどうだろう。」

(2) 防災設備

昭和49～50年頃の修理中に放水銃・消火栓を本堂に2カ所設置し、三重塔にも放水銃2基を設置し、境内全体においては計7カ所に防災設備があったそうである。また、かつては本堂に渡廊下（図2、本堂に向かって左側）が付いていたが、総合防災計画の際に撤去したという。水源は、山の上の大きな池を使っているそうである。さらに、自動火災報知器について松原住職にうかがったところ、本堂には設置されていたが、火災発生当日は切っていたそうである。自動火災報知器を切っていた原因については直接的に何うことができなかったが、誤報を一つの原因として類推できる。

(3) 本堂の被害と今後の復興計画

松原住職によると、本堂の外部材は全てに檜材を使っていたが、今後復旧に向けての檜材の調達は難しいと判断しているため、焼失した扁額の代わりに炭化した焼損部材を再用する方針を考えているという。

また、護摩堂（修理費負担：県50%+市25%+所有者25%）が屋根修理中であったため、護摩堂に安置していた阿弥陀如来坐像を本堂に移していたが、今回の火災で全焼してしまったそうである。松原住職は、今後写真パネルだけでも作って飾りたいと語った。

なお、今後の復興計画について伺ったところ、本堂の焼損部材・瓦礫などの片づけを2013年2月2日に会陽参加者約200名が集まって実施したようで、松原住職は「今後、お金を集めて、本堂を何とか建て直したい」と述べた。ちなみに、金山寺の会陽は当山が一番古く、毎年2月の第2土曜日に500人ほどの人々が参加しているそうである。

(4) 防災に関わる課題

最後に、松原住職に文化財所有者の立場からみる文化財防災の課題について伺ったところ、①無人消火装置の開発と②防災設備の費用負担の仕組みづくり（国・自治体の補助のありかたなど）が挙げられた。

①は、カメラなどを設置し遠隔監視をしても対応者（住職及び檀家たち）が駆けつけるまでに時間がかかる点や対応者が高齢である点を考慮すると、覚知だけでなく遠隔操作で消火できるロボット・無人消火装置が消火活動に効率的であるという考え方である。②は防災設備の設置費より維持費の調達が所有者には負担となるからだそうである。

4. 被災現場の調査

図6は被災現場周辺の状況を示したものである。本堂と三重塔を中心に放水銃・消火栓が設置されており、その数量はヒアリング調査で得た通りである。三重塔に関しては放水銃が東南側・西北側の2カ所に設置されていたが、全焼した本堂には東南側に放水銃1基、北東側に消火栓が設置されていた。

図7から図14は被災現場及びその周辺の様子を窺える写真である。ヒアリング調査によって筆者らが現場調査に入る数日前に瓦礫などの片づけが行われたようで、現地調査当日はブルーシートなどの覆いもなく、図7と図8のように風雨などに曝されていた。火災の現場には軸組の柱は組み立てたまま多くが残っていたが、桁・梁、小屋組などの部材は崩壊したまま残っているか、本堂の東側に移動されていた（図6参照）。また、今回の火災で木造の部分だけでなく、本堂向拝前面にあった階段の袖石の破損はあまりなかったが、石段の破損があった（図9）。

瓦礫の中から仏像の破片などは全く見つけることができず、仏具や金物（図10、図12）、焼損部材取り扱いに関する注意札（図11）を発見することができた。岡山県文化財保護課の発表⁷⁾によると、県指定重要文化財の木造阿弥陀如来坐像が安置されていた場所周辺の建築部材等を撤去し調査した結果、木造阿弥陀如来坐像の一部の可能性のある炭化した小木片及びその隣に安置されていた木造不動明王立像（未指定）の台座・持物（絹索）の一部と思われる炭化した木片などが確認されたため、木造阿弥陀如来坐像は焼失したと推定されている。2013年3月1日付けで、岡山県教育委員会は木造阿弥陀如来坐像の文化財指定解除を発表した⁸⁾。

また、瓦礫・炭化部材などを撤去・積材していた所で本堂の配電盤と推測できるものを見つけた（図13）。ヒアリング調査で電気の漏電が火災の一原因として挙げられたが、配電盤が古いタイプであることを勘案すると、

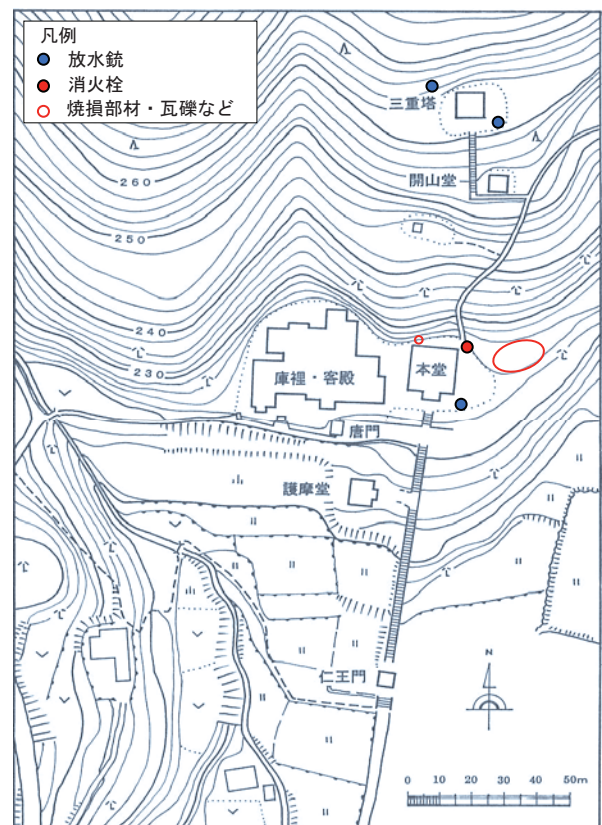


図6 金山寺境内建物配置図³⁾及び防災設備
(防災設備等は、筆者らが現地調査に基づいて追記)



図7 被災した本堂の正面



図8 被災後の本堂と放水銃



図9 本堂の階段の被災状況



図12 火災現場から回収された仏具など（上）と現場周辺に散在する瓦礫（下）



図10 焼損部材及び仏具（花籠と推定）・金物など



図11 焼損部材取り扱いに関する注意札



図13 配電盤



図14 被災した樹木

(※すべての写真は、2013年2月6日に撮影)

電気の漏電による火災の可能性も挙がる。その他、今回の火災で建物が全焼しただけでなく、本堂前面の西側に立っていた樹木も一部被災していた（図14）。

5. まとめ

本稿は、火災によって被災した重要文化財金山寺本堂の被災状況と文化財所有者へのヒアリング調査の内容をまとめたものである。出火原因は不明ではあるが、ヒアリング調査によると蠟燭の転倒（風による転倒か、動物による転倒を推定している）、電気の漏電、放火、その他（石油ストーブ）があり得る。防災設備としては消火栓、放水銃、自動火災報知器が設置されていたが、火災発生時には火災報知器が切っていたため、機能していないことがわかる。また、金山寺では平常は住職が一人暮らしをしていたが、火災発生時には留守中であったため、無住寺と同様の環境に置かれていた。そのため、近所の住民による119番通報はあったものの、初期消火のための対応が遅れ、全焼に至ってしまったことがわかる。

初期対応が遅れたもう一つの理由としては、常時における地域住民を巻き込んだ防災訓練の不備がある。また、住職・壇家たちとも高齢者であるにも関わらず、使用者に配慮した防災対策が講じられていなかったことも一因となる。

今回の事例調査を通して、高齢化社会に向けた文化財防災対策が必要であることと、無住寺社（金山寺も普段は住職の一人暮らしで、火災発生時には留守中だったため、この例に含むことができる）の防災対策を立てなければ文化財の被害を減らすことはできないことを問題として指摘できると考える。

謝辞：ヒアリング調査にご協力いただいた金山寺住職の松原宏澄氏と現地調査にご同行頂いた東久保政勝氏（住友電気工業株式会社）と飯村治子氏（株）竹中工務店）に深甚の意を表します。また、本研究は住友電気工業（株）による受託研究「文化遺産を対象とした人為災害状況と防御システムに関する調査研究」（研究代表者：谷口仁士）の支援によるものである。

参考文献

- 1) 読売新聞, 29面 (社会14版), 2012年12月25日.
- 2) 京都新聞, 23面 (社会17版), 2012年12月25日.
- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会: 岡山県指定重要文化財金山寺三重塔保存修理工事報告書, 宗教法人金山寺, 2002年11月.
- 4) 文化庁編集: 国宝・重要文化財建造物目録, 第一法規, 2000.
- 5) 文化庁監修: 重要文化財12 建造物 I - 社寺仏堂・厨子, 毎日新聞社, p.58, p.118, 1996.
- 6) 巖津政右衛門: 岡山の建築, 日本文教出版, pp.27-33, 1966 参照.
- 7) http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/305922_1354011_misc.pdf 参照.
- 8) <http://www.pref.okayama.jp/site/16/312924.html> 参照.